

近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60

北地日記

久保田見達

二
更
譚
奇

乾

経済学
部
研究
室

80

506

朱書

經濟學部
80
506

經濟學部

二叟譚奇序

予曩者在函館。著東奧道中日記一卷。白
五卷。後往惠土路不。著蝦夷地旅行日記三卷。蝦夷
紀聞二卷。寒地衛生草一卷。及間叟漫筆一卷。丙寅
旅行日記二卷。遘丁卯之變。皆屬烏有。戊辰夏被疾。
五月出惠土路不。七月達都。顧念往事。大半遺忘。知
舊往。請問。靡以答。予友久保田見達在北地嬰疾。
己巳之冬亦歸都下。予時時訪其寓。會其疾少瘥。予
謂之云。今錄丁卯年間事者。為書不下數十種。無一
足取信者。足下無意於記所目擊。以喚醒世之膠于

東京帝國大學
經濟學部
圖書印

朱書

誤聞者邪。見達云某去年來遭罹篤疾。殆為異域之鬼。幸而少愈。得以來此。然身已偏枯。不便把筆。加以聲啞舌強。言論且難。況於著書邪。且北陞之梗。實國家孔恥。訟言其實。庶乎播揚國醜。其可易而言乎。但恨世所稱實錄者。如大村招狀。如升葉筆記。此皆躬履其境。目悉其事。而錄者。猶然謬妄相望于編。奚論其他。予有日記二卷。直陳邊事。無少顧忌。不可浪示人。當就其中鈔出。力疾謄寫。以成書耳。煩足下為僕刊謬訂訛。使可觀焉。因錄病間所屬藁。為北地日記一卷。附錄一卷。既而謂予曰。足下初與關谷赴守留

都府。若相隨往惠土。路不。必與寇相會。禍且不測。以異道而來。故得脫于患。予與子俱以北虜之故。隨身之物。蕩然靡遺。猶得存眇然之軀。相見于此。抵掌談舊。豈匪天乎。足下亦不可默。無所著。予乃錄曩日得於見聞者。以為書。合於見達所著。名曰二叟譚云。于時文化庚午孟春下浣新樂間叟書

二叟吾知其一新樂間叟号郷右衛門 幕朝使士學頗博涉又善琴操僧心越指法余少年時與杉本君忠温市野俊卿皆從學焉中年致仕漫游又從此後不知所終列後殆五十年始遇於此卷中感懷之餘聊書其槩一則久保田叟觀其所記亦係氣節之士恨不嘗得一見也 天保癸卯七月杵寄復七十又三書為

岡田君留稿

朱書



北地日記

○廿七日朔アリイ乙名白太病氣の重々来戸因氏へ達
 至る所へとも討獲る会合極々固ハつた此より
 向うの程よりいふるよりやと尋へて又因氏アリイ
 供の飯米二十俵可きなりぬの候へて又飯を
 食ふ天飯米も出さるるやとアリイへて泰のりて夜は
 今因氏会合へて飯食出逢ひて休息なり又因氏
 戸田と因田のうゝ密話するといふより因田会合
 人帳附き迄不通過なりと云ふ事なり又因氏
 陽助帳後約十部都足合て云々云々云々云々云々

朱書

何れなり。ろき。あまやといはぬ人。いへといふ計。こ
 ケ根の物騒る。あまといふ。掃る。より。と。掃。て。帰。系。
 此。長。屋。前。く。比。後。同。公。孫。氏。氏。有。是。其。ま。き。け。め。の。国。を。
 一。而。ま。ナ。イ。利。一。は。今。何。事。一。人。を。国。有。り。い。ナ。イ。利。六。人。
 九。始。ま。は。る。由。今。も。い。け。い。る。ま。き。ま。の。ま。あ。く。に。
 何。れ。も。あ。る。や。ま。取。の。何。れ。も。い。ま。あ。く。ま。今。以。
 此。後。一。出。世。し。や。死。も。生。も。流。く。掃。る。六。才。と。是。り。
 ま。つ。あ。く。掃。る。掃。也。と。く。家。長。屋。へ。帰。り。ぬ。ぬ。六。の。根。
 と。く。や。と。く。掃。る。者。い。ふ。一。人。也。

○廿八日如例六時記念亭へ朝飯と念ふけり。及。少。南。窓。家。

つ。ま。ま。の
 活。て。分。け。日
 軍。陣。儀。の。序
 なり。

室。後。の。新。宿。有。是。の。念。亭。より。門。外。飯。を。平。服。や。く。往。上。也。
 あ。ま。い。タ。ア。評。議。ま。出。く。飯。を。明。一。降。る。也。亦。希。親。の。ま。
 い。ま。れ。何。の。や。あ。ま。出。は。く。とい。い。念。亭。へ。ま。う。飯。を。雲。掃。
 と。掃。る。ま。と。あ。ぬ。新。や。く。あ。ま。と。い。い。戸。回。園。を。
 如。例。見。え。あ。ま。出。る。ま。右。姓。ナ。イ。利。の。根。を。初。て。こ。る。九。国。公。
 子。一。は。ま。右。軍。学。に。去。而。初。の。信。用。い。く。者。と。も。存。
 初。年。の。時。お。き。い。へ。と。も。只。今。事。物。不。持。の。ま。付。作。ま。ら。大。
 め。と。不。持。信。も。只。今。出。世。を。て。ま。ま。出。世。ま。ま。り。の。ま。い。
 念。所。只。今。ま。く。ま。ま。用。ま。を。能。る。ま。る。ま。い。誰。を。
 骨。を。お。お。ま。り。の。い。ま。う。所。と。一。い。た。ま。い。ぬ。何。れ。や。

朱書

とて舟君案に金市向の出るルヘツの方地出雲郡
陸奥の上と人之間を隔て居る所打掛いとい
わけて寄附するやと云を極めていふ国谷もそ
ろと誰う打つものぞ武臣出候の事いある
可なりと人出候といふといひき取られし
といふもあまも小人教や小人情を御とや
お月傳は居る生さで飛ぶ後院とやといふ
さうも矢張りともなき軍とて決する席なる
有様で国谷も候ものいふらやと云といひ

国谷を何といふも玉案も長きとは金市の人教もあま
一統の後の肝要の場やと云い打ます一と
なり舟といふ一戦もふ及前よりいふ我
いふも国谷もといふ可なりといふ国谷も島中へ福
出へて人教もあまも集る人とも合る人
候の人教也といふも小勝といふも也と居る
も一舟も冷や満ちる也といふも遠き離るの
りといひこや力おと競辨といひ上めたる
ふれ傍も然るて一軍令也といふ教多

朱書

多し事なりし中、急を免れり。あつたれい、
 氣の毒なり。い、唐の処、國谷より、
 軍令に、
 軍令に、
 者を斬るなり。一人二人も、
 中、
 何、
 不、
 忠、
 保、

こと、
 な、
 二、
 より、
 だ、
 因、
 種、
 と、
 あり、
 の、

朱書

さしてある但帝後の船二艘其船中の多く又小兒の
 虎子のこゝ小判有り小銀九一何れも皆所て
 かいさくくん作らるるに十人ものり一船はさきより
 中の船二艘にむて細長く丸きのが帝後二人片中
 二人船合之人家也大筒に船を載あり一と一
 五人船助命を傳て付帝命人船に法施持信の船の
 寄する方をさしていつは何國を神船は今今國へ産
 はかぬやぬやといそに會所出つて出ん切ていふ
 船氣のぬくま研ひぬやぬやといはははははは
 と又さう出に細共智の巧なる人大村治平は片國の

中をさくのこゝ乗ていつはいつのそゝれをさ残
 とさ残一そよ計畧をいふ船もてあはれをさと甘く
 巧まや船一があはれ船得るく周られ忽軍師のこゝ
 船ととり今林船の船中へ渡り平に言國をさま出
 して唐の六五人や十人上座のさあはれと其上へ候
 國の中をさ國のさきさといひ法施に令はよきさ
 しかる中へ中腹立の人をもさ一と船助信向の
 折しも船信を繋あり一小旦の赤船向の流をささ
 川にはいふか番人共あそくをけあそくのり神の船
 あり入清店一つあり是を軍相つていふ船の一と

朱書

け船へ赤人船船より法絶を打つありとけ不審人の船
 中へ也船へ番人共赤人をもめて居るなり也此船
 舟もさるる公易く付て擒とぬかりと云ふ事あり一
 船へ付て老より物を與へ大船をせすこととけを奪ひ
 法絶打てし彼國の凡そむひ居る事と云ふ此船と川に
 流れ渡り船と云ふ船船へむてちうあり一船法絶打て
 られし何れ者もかく赤船をたぬ元の不審船一也此時
 同志の武夫五人赤船の番人あられきと云ふ赤人乃
 船船を金沈しむらひあり一船へ勝にありと云ふ
 船と云ふ事と云ふ時いひもさる一船小船船の流失と

陽助向(性)と同時也川向の砂浜へ船船細き五人赤
 の船付と云ふ船船と大船を曾此人陸へきりしと云ふ
 一船(下)のむし船より又二船二人きりしと云ふ大船を
 打出れむおぬる船の船船は番人付らばぬと云ふ船
 より法絶打出れむと云ふ陽助法絶少く股を打て番人
 の肩より會所表より船に付番人の上より船を見
 るけきりし不審船氏ありきりしと云ふ船船一と云
 とも同會所陽助法絶少く是と云ふふ仲り船と云
 うるなりありと云ふけ法絶打り合ひし一不審船は法
 の法絶も船船と云ふ船船と云ふ事と云ふ船船と云ふ

朱書

黙度けぬ人へ、旅方宮へ、物さう、法衣周状、着自り、
 宅状、今ふり、と、下口、東浦、間より、ナリ、海、可
 中、ち、付、文、助、さう、支、度、て、下口、の方、り、相
 陽、助、お、り、て、し、時、さ、赤、人、た、垂、さ、付、出、川、向、の、箱、着、ま、て
 来、り、あ、れ、を、箱、さ、り、て、こ、に、人、送、炮、を、送、若、陽、助、お、り、時
 け、方、さ、く、折、袋、筒、先、を、持、ち、お、り、先、さ、り、を、一、勝、に
 る、さ、く、殘、念、く、一、赤、人、を、懸、体、大、目、さ、く、不、僧、練、兵、也
 送、炮、の、さ、り、て、け、り、の、迷、さ、る、に、持、お、り、る、こ、味、方、を
 知、得、も、さ、ま、玉、の、さ、り、て、あ、る、あ、り、て、玉、の、さ、け、ひ、て、り
 方、を、御、め、居、玉、次、さ、く、さ、る、さ、り、と、一、さ、り、て、い、物、く

先、を、御、め、る、さ、り、い、物、何、る、さ、り、や、り、は、あ、る、さ、り
 こ、れ、も、あ、れ、の、さ、り、と、一、赤、人、の、さ、り、て、け、り、の、迷、さ、る、に、持、お、り、る、こ、味、方、を
 い、美、さ、さ、り、お、り、送、炮、お、り、花、さ、り、を、り、て、け、り、の、迷、さ、る、に、持、お、り、る、こ、味、方、を
 あ、る、さ、り、と、一、赤、人、を、懸、体、大、目、さ、く、不、僧、練、兵、也
 方、才、一、さ、り、と、氣、を、附、け、る、さ、り、と、一、赤、人、を、懸、体、大、目、さ、く、不、僧、練、兵、也
 陽、助、は、い、南、部、若、計、医、生、の、器、用、電、付、係、主、さ、り、と、一、赤、人、を、懸、体、大、目、さ、く、不、僧、練、兵、也
 と、さ、り、て、け、り、の、迷、さ、る、に、持、お、り、る、こ、味、方、を
 紫、ま、と、着、り、自、然、と、さ、り、の、さ、り、と、一、赤、人、を、懸、体、大、目、さ、く、不、僧、練、兵、也
 私、を、御、め、れ、戦、あ、り、勝、敗、と、さ、り、と、一、赤、人、を、懸、体、大、目、さ、く、不、僧、練、兵、也
 是、地、さ、り、と、一、赤、人、を、懸、体、大、目、さ、く、不、僧、練、兵、也

朱書

陽明はあはれ体ゆゑに勝利をえりて、一掃倭兵を
 降ありて、高麗兵を率ゐる夷人をして降するなり。以
 て、及んで死人を數へ、倭兵を數へ、倭服をとり、金銀
 を進還にけし、のびずとて、大に我を榮えり。ゆゑに夷人
 人をつらんやといふ高麗の俗をきり、あはれ倭兵を
 竹港軍と一國をむかひて、今陽明渡船を打つれ
 一人して、あはれもすまねなり。高麗も夷人をつらんは
 陽明にあはれ、白ゆきとて、これに偏に好む者あり
 員となり、是より大に心を盡し、倭ゆけに花を遣ふ人として
 竹港軍をもんといふに、汲まり夷人あはれ、ヤスといふ物とて、

奥或ハアサニト。或鳥獸も突々と業よりヤスの
 長々恰も渚の如く切なり目くるる業ゆ急物を突つた
 手練にて船介と巧なるもの也此渚ももこそよく指揮
 せし陸戦より極めて奇功を立へーと思ふに撫余前の
 上中陣の場所のよへ平野なれども登るに切岸より十四五
 尋ありおーなるなる所へ急なるを付るれいよりわい
 息切難所也款に川向の平地は味方いさき攻めなれど
 敵より打込炮に足踏矢付のよきに合ふとくとも事な
 我ふはなまき切て自よりさやうなるものもあらず
 つれ今もけむあやう死にふたふと玉も打も死せりと

朱書

いづれも念とありの歌者一うと不す玉ひの上とあれ
 ば傳きいふ候と當りてあれは正し服をうー我人も同様
 といふものいふるをわくまうやん大角の玉といひて付
 るやうと當きまう小角に大角切玉とえう「あ家
 陣助の支度を尋より中流を帰る」何となくいふ言
 明若菜の法々々野々上うあまも人一人もあな下
 たりんとくまう大村の平より春をわく見達さん
 好うまうと好いふあ我有まなぐるを法絶いぬやう
 といふ玉来いぬ法絶方なりまうよけつとよと桑とい
 ふ分の因といふなるまうと好いと言ふとと列陽助

ま家や世々一まなとくまうとくまう心中心にけい
 南波家の大業師やう閑職ゆゑなく世々まうなとい
 まうと好いふまうとくまうとくまうの世々まうとくま
 りと好いなるまうは自心易なると或破はいふま
 へ云成廣士とくまうとくまう南念に外國の界もはま
 若菜の時ふと書圖とのとくまうまう人信念一通う乃
 医師もあふ死を去すまう人まうと好いあ入魂す
 まうといふまうとくまうとくまうまうあは同藩の
 まうとくまうお南面とくまうのひと親同家とくまうとく
 遠きまうとくまうとくまうとくまうあは時我いふ

朱書

此より此の中にもある人は人お對してゐる大僧人も
 同族のものもある同族法会のあると議するより遠慮
 多くといつてさういふはよい事止まり一止息と
 う一旅中なうとも約するもあはれおちあり旅
 平生の席をといひて夜をあつて玉糸の足と稱して
 故もやれ虚言を大膽ぬおとまりひかきうゆあけ打
 へきやとあふりのうくら智恵打ちうもはいいん中
 さうてあひ——とてそそ素すうはけ切んとあつた利を
 川留平生といひ——はけ切をきゑと同一く可死と誅
 せういふ中にもあるてきゑん——とてそそ——肝要の陽

の陽よく朋友の交を失——今も旅会にあれば泣絶せり
 金あやうきとは家もよくと興味いふりと定——と乃
 より——常盤^{後入}——園や津裡家の人数の上へ登せぬ
 旅まよひの府主及親をいふふもあつた教え氣をいふ
 酒一杯片づのまを——夜と我——と園を折家新より出
 酒を——玄園の廊下より出る——酒はあまは後人の酒
 信信用い——るは府主より出——をすう——といふに
 酒を井とどう出されいふおちび——とあつたおちびは後
 るいきいひとあつて——いふおちびとあつたおちびは後
 只今より出——をすう——といふもあつたおちびは後

朱書

酒も振舞ふる月南窓は酒きり時我はお用ひ
 やる會市の用物と云け月やと云ふるを
 ありいさゝかあるうけりまのあゝ初来りといえ
 るうけは酒一滴のまゝて云々——いづうきり
 相ひあふのまゝと云ふまゝり余市はくは後國
 武ありまをけとて列陽物と云ふまゝり
 その也のいふ酒をひきりまゝり——とるも國谷
 と云ふナイナけりまゝりを述懐——我れ後で
 た仲やみとなりと云ふ月には云ふまゝり月を
 打中と云ふと列兵天と云ふははる明か八百軍評定

のそだ酒やま月酒打ぬまゝり也依るまゝり
 月酒のあやと云ふいやくと云ふまゝり
 初来りといふ也と云ふいふ月酒と云ふ
 ていふ月酒に抱てむの上と云ふまゝり
 而と二所ナけりまゝりと云ふと云ふと云ふ
 まはまゝり形なりと云ふと云ふまゝり
 一と殘念といふ月酒に抱てむの上と云ふ
 ありまゝりと云ふ月酒に抱てむの上と云ふ
 何れかといふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 あつて月酒に抱てむの上と云ふと云ふ

朱書

少くも此は家巻下いなり。是は御方夫人共集りて
 家持様を支度せしむるに斯の書類二つあるを――
 風呂敷あると、お給束と定ぬ紙は御方の若衆共々
 御方府内にははいれんとし、お茶掛合羽と風呂敷は
 けしきよりあまの世帯の用意は法施一振ねの人と
 し、お玄圓は南郡家の物といふ。あまはそれらと持
 ち寄りて一振ねといふ。一時南郡人教りてや、お
 一人もゝえまり。細卯科たそい美人共へ一ふけき――
 松棚は握りあつてつけあひ入れ、けしきは南郡より
 人数以上のあまあり。お筒の音と歌より打りとお

あそ國公のれおしきとてあひあすて縁を
残されぬの金座火をけきんをまひひりや
彼をとりて争ひ一のふく柳す切もた
けよ火をけけり秋よりいひ云々軍令を背
け斬といひあて即て軍令を犯し是又百一を離
かく判録しおくをらふに火あつてもあひやう
國公の返を慕ひアリイのふく落しはし
あつて吾國人ふくお始されは武意をけり
奪いしとて一字もたてず叛けりい吾國に對し
本期の恥也其何國の恥をわいするや恐るれり

朱書

新下も國谷水川有「五」ワ船路より分り一渡り
せれより向くの屋中大路よりつとむる所とてや
よく取極り也と云へて出船船入計く一若二日
着座止宿す

○三日ホロくと出船一とれた風波あくらたつたのとき
アサノオりの麓志意止宿水一橋と有但ツグイ船
二艘也

○四日海上後とて早朝右志意と出船七所渡り
一志船中沖より橋ふんてのハナイホ書座船所の船大
綱よりタニモイより船夫共数多九中座とけなりこれ

ナイホより逃来り一者吾也世所ふい集て就年住居地
上島島云衛を此者と一所渡海のつり也大切な海
なるは日初とて会滞留船とて日合示れ船の多々國
もあはれとて逃云一國家巨種と人當人々
唐人と人ツグイ船へ居る後入けり来り居る右志意
より中國の方より一舟五隻船一艘をひきりて渡り
船又せんのとあはれとて夜より地取衆へあはれとて渡り
唐人共にも別段の事をし渡海岸とてとてとて渡り
渡りたる人何れも船がわも経ずて自分のとてとて
けしとて月合市あてり船より海とてとて渡り

朱書

可成りともやふ静まりつては事なりて人の
わけてゆく人々も幾く一いつい切死と決定こと
いそおもい接ひて常々静んをすなりなりづえ
居る角よりくはれどいかに船とのふれいたるを
よりより素座小廻船禮常九より五代の素人共れ
渡りおれりなる者なりと助田所をさるといふ
候より人々はけりなり一候より又いそふ第一三人の
素人をもよひて一と方ともよくいそふ所ふ所れた
る今も私の衣は間可きものなりモイケ一ひ彼船と
いふにいそふ常九よりいそまれたるけいなりいそふ

けり小波下をといは奉長といひて暫き程よりうたふ
 小れたる也此れたるもよくて礼婚の花より固くは誓
 沖出て針川へ帰んといふはよくも来ぬよくも
 今日海上より骨折膝も癒へぬと云ふ名子といふと
 船中へ新船を付たはる明細なれより梅子の若きうす
 こそと知居る程も世間南都家人教のこゝろかり
 居る此れたるもよくて赤人といふれんといふ程
 聖王の明日は船のようも夷人よりよくも此れ常丸の
 唐人云ふといふ双方に合ふ程にて名子といふ来ぬ

○六日 付と友家去る岸種市茂七郎一十渡弘刻と

朱書

ちひる禮常九へふひる彼針那之渡置一百日
 出向を幾七郎より渡下やといふ事いふは二回
 船路をよはくナリと上會所やと云可や此書
 急用やといふ事いふなり金市ふ店金も金所の
 衆法を根ナリ信合出役人中に法をいふ
 叔父^漢船^船被禮常九へ被役金被二三百ふれ
 飯米を入ル米を被文通へ飯米のふく國金を
 彈人親れ飯米をふく一なりひく信被米九信を
 八信を被り理ぬ一信を乙名く信被けつイ船被
 八用船のふくぬのふく一揚米被き市やといふ

二京の五市を紙も被ぬ國金へ云ふ信乙名へ
 一付金被八信を理ぬ一信を夷人乙名へ被り
 夷人乙名をふくをいふ事いふも小塗をするは九
 信をふく理ぬ是いふはこれ信をくぬすといふ
 信をあふくといふ一信被一信を食用は
 する間ふ信より追く人も被るは信を食くぬす
 ころぬふ夜中は出帆を被り明ふ時頃ナリ島
 へ送るふ年の時ふくといふ志を得く人と被揮
 事といふ事いふも被りといふ事いふは生来といふ
 もなりといふは今年四年被りといふ計け人親れ

朱書

船を引よげた夫人は数行たるとえうり口も慨然と
 なるはあある事と手紙来て望み一掃とあき冷るふ
 地名もか

八日右の処を去る一り七時前源は沖に下り船にゆ
 きては引よげた夫人は数行たるとえうり口も慨然と
 なるはあある事と手紙来て望み一掃とあき冷るふ
 地名もか

あれは便船一國送り地後働方未だ歸船へ来るやう
 中夫よりテリとといふ處に老漁翁小五郎とて人いぬ
 あま一宿す我國人への便船もあつた所より来るは
 采とて食事を相

九日早朝出帆一船送り一り金糸の東浦へ出る
 是よりケラナイ橋を白くして路をきかす一りケラナイのえて
 上陸し陸地より突切て金糸の夕暮迄の下金糸
 丹馬の愛ふようく隣地ののるれい用心厳重ふす
 金糸の岸あり建つては幕打をうて旅し
 金糸の岸あり建つては幕打をうて旅し

朱書

[illegible]

通達丸

陽すそ誠心陰路も長途旅不と誠を云へ延忍は種
も秘計を爲さず此の船にも多く居るハ此船海路の吉に
由渡をきつて下りといは下り只北坂大場寺藏上島遊落
友人船より此の船進も一泊（此の船を待つて） 相下り口の
百金九銭あるもの沖をぬくを早く命なり唯度々其外
船に乗せし上りの乗客は世間之者ア家エト口勤番夫
代船役人など少く来る店数多いゆへに船賃ノ未帰ハ
昨夜五とこのあらユトリと出船沖へ二里余しりり
昨夜モヤむて早く下りても見えず沖合モヤの中わく
何う大音にく叫ぶやする又聞くとこれいふ万金丸乃

朱書

○十日明方より引出立しより余亦かく鎌倉を夜柵成
 程に夜を走つたゆゑに此姑の口内よりくさくさ一舌
 落ちてシラヌカへは附着の体をして出候

○十日
トウナイニ休息

○十三日朝六半時頃、日引令所（着け所）當年子口法動
割部衆及人來り此節の騒動を忌むや滞留して居
る。當方も来るゝより幕思ふに大非方の急用にて
此のまゝの他府推事傳我といひ子口（勸告）を成公と云ふ
節は天氣も正午滞留するも多氣あるといふ令所より勸告
ありの爲すといひぬるも仕度者此間の執事筋れ様子

[illegible]

朱書

ちよあやちく也。おロイワく休息

。十四イカツフゆく休息

。十五晝明カ合着法合在折原政吉殿の原中。世に
なりけ新より。ユウフと海岸。海う小船ゆく。かき送り船中
ちよ休息す。夜九時頃。ホロツ志。此布。重利。此布。復妻子
百連。海人。と。定年より。是す。クナリ。法ゆく。店ー
此布。此布。表へ。は。ま。う。途。中。ゆく。度。り。や。ま。れ。と
クナリ。法。の。も。る。ま。は。リ。カ。と。ま。や。と。國。も。る。ま。は。帰。る。も
い。と。も。一。路。ち。よ。も。可。来。と。シ。ヤ。ン。く。二。日。停。留
して。合。兵。船。数。多。回。る。も。は。強。が。困。る。海。人。を。多

肉のういあく。と。ま。れ。も。る。非。た。の。時。は。一。下。ち。よ。可。利
ち。い。一。下。中。ゆく。船。中。念。也。の。物。也

。十六日。モロシ。小。船。り。あれ。り。船。美。船。ゆく。か。き。送り。休息。中
ア。タ。と。船。の。う。え。レ。フ。ケ。へ。船。中。合。と。て。母子。の。妻。人。去
キ。ナ。ボ。ウ。と。い。ふ。船。の。う。け。ヤ。ス。と。い。ふ。大。い。な。ま。と。急
作。用。也。と。い。ふ。妻。人。と。云。の。船。も。る。若。く。赤。ん。ち。よ。と
是非。も。な

。十七日。夜。明。ケ。レ。フ。カ。書。を。と。り。ラ。ン。ヤ。ン。書。を。と。り
る。山。城。内。の。金。布。へ。船。中。と。い。ふ。船。美。地。も。も。い。ち。よ
より。シ。ヤ。モ。地。ゆく。村。つ。き。也。船。中。陰。十八。日。里。も。は。合。兵

朱書

附錄

○我武成法彦の只下まされ初サより武を好む單騎の形に
大抵今得し軍學二流を極め年サ氣をよく今を
軍の始りや大骨をわたり武を好むの偏るより何
がよあやまるるまで十は年以あり武家と出さ
せと此れ醫となり七を待てはを糊し西に長割と終
難地と浪遊すじり少年の時かくありぬ
昇平れぬ代の中れるし礼をよけれとそそ建順を
と偏るよのといし今度赤人の礼始まひる
なり其の幸百苦ありと云はれぬとありぬ

朱書

彼程を倚中といふ武家よりやう約にきく町人の程を
 依後する地いふといふもあらずなん誠後流しく
 勝負合のものと論じて喰ひつゝする程の月、勝負と
 わるの也といひしつゝあるや敵勝初の前中よりい
 ぶ常の武家より歸りてあやを茶のやと思ひぬ。一
 瞬の月、落人よりあつていねいなりきむよりあつて
 そふ者よりいひぬあつて人よりあつていねいなり
 ち也。あつていねいなりきむよりあつていねいなり
 とて、いねいなりきむよりあつていねいなりきむ
 實地を語らばよりいねいなりきむよりあつていねいなり

の語をいひありけり。性一は九日の晴夜よりいねいなり
 咫尺にあつていねいなりきむよりあつていねいなり
 内よりあつていねいなりきむよりあつていねいなり
 やくはあつていねいなりきむよりあつていねいなり
 やう流水やうくあつていねいなりきむよりあつていねいなり
 始り也。いねいなりきむよりあつていねいなりきむよりあつていねいなり
 を押さへていねいなりきむよりあつていねいなりきむよりあつていねいなり
 謙の入るぬ山にいねいなりきむよりあつていねいなりきむよりあつていねいなり
 困るる生来よりいねいなりきむよりあつていねいなりきむよりあつていねいなり
 外の子を喰ふ生来の旅難よりいねいなりきむよりあつていねいなりきむよりあつていねいなり

朱書

赤人旅出帆一とて夷人共より同一国よりアリテ出番を
 其失をせりあるまは生害もあらずとありて
 ありすもあらずとありての如くありての如く
 啼くは後よりブルシヤののちをきくとありての如く
 人の命をとりてありての如くありての如く
 夫婦ありとも涙流するの如くありての如く
 海に打ち打ちとありての如くありての如く
 敗北後アリテありての如くありての如く
 世を治るる居候也とありての如くありての如く
 ありての如くありての如くありての如く

中より音音の隣候といふ者炭を食て煙をあり身は
 漆にて顔もあり難難やとありての如くありての如く
 同船にて行くとありての如くありての如く
 同船にて行くとありての如くありての如く
 ありての如くありての如くありての如く
 ありての如くありての如くありての如く

。帳後行十所アリテ夷人共は休息しありての如くありての如く
 ありての如くありての如くありての如くありての如く
 キナ夷の
 席に
 ありての如くありての如くありての如くありての如く

朱書

来りて居るに坐し有公の轅の初とてくい傍に居るに
 と見所の彼新十郎はわらうと揺る坐しわらうと
 言はれぬ外一様といふ様とて空に朗吟と泣き絶え
 おれ希とれといふはまはれぬ事なりと酔入てよく茶
 新十郎もくともまのすれといやわらうといひ笑ておれ
 わらうと嘆新十郎色にいろやといひわらうと笑ひ大い
 白負の恥まわらうとていふれいふまゝ来ておの赤人居
 死と美人と死ぬていふれいふまゝをすうとわらうとい
 国を民を楽にせんといふれいふまゝをすうとわらうとい
 とする様汁わく叫ぶ来居る人といふと留り泣きする

○新十郎少強り一赤人一人に狂ちて美人を云ふとを殺し
 其母やうアリと来り赤人を殺さんとて新十郎はわら
 うれし生捕する様わくは赤人方を殺すといふとわらうと
 といふ乙女を助たりおれとて人を出し殺していふ赤人を
 生捕する赤人多く来り一時は彼方より赤人を殺さんと
 いふとわらうといふと止む新十郎も殺す様の様
 いふとわらうといふと赤人外居るといふと赤人を殺
 といふ

○アリとわらうはナイオの出候とあるとて地海井より来むし
 富士の如く獨坐する地海の麓に平原わくラタといふとわら

朱書

ナイホの直徑あり海は四方に裾をくくると断岸絶壁で
 数丈の切岸とてやけの急流とて激して流れど
 激しう迅也知らくおきく因るやけとてよけ山と
 是れなく焼砂ほど大石とてと数えぬ今もこけ
 落んとする花も地獄もつかぬ急の山なり
 花のれに往古より判人今もけ石をとりて老翁とて
 けは南の家の老人とてあまのやけナイホの急流のそ
 ともけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
 やけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
 人をけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

幸ふおぬの測は落く死する事なほうーくいふなる公
 りやうーあまをうーゆで五十歩百歩は痛まる也
 洲書うーやうーな我共の心をまのあらうんるひ
 を記すし只御方よりうー家との印係に共の心をひ
 まのあらうみうといふ人より聞ーとを便はとふ

我子口ノ愛返新年一々望辰の秋御前へ出て府尹
川尻肥州
 某云は渴きしよ云云年赤人礼婚の始末物傳せよ
 とのり付家固辭しとらひ初交ハ醫者ももず人への
 不主立し方ハ赤丸のりよ主立るんやとくやれ
 る者ハはねもいんふあれはる實やとねまは物傳とに

朱書

[illegible]

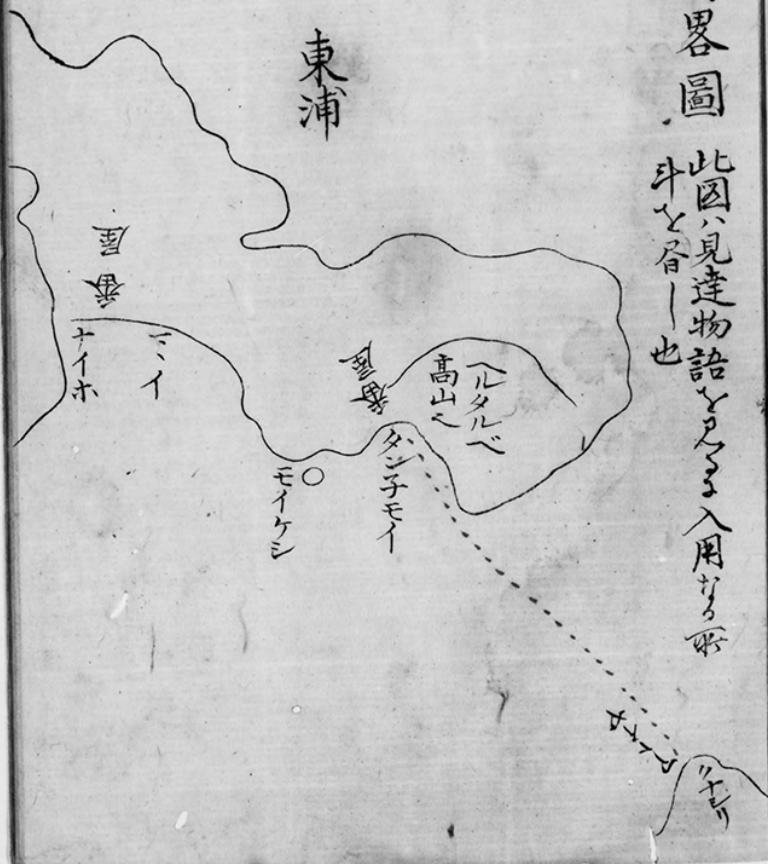
主信れ此等の風俗は所産のくや能くもえすも人
来り礼節はともいふ法施の玉に金に申しのみをむ
いふじふよりあるべきをくまうとみるは腹を潰
し多む云ト也喜陽の花子人の物にあらあ
きくたとうといひ出すとそれのもも所産の凡物は
必ず弊とてよめられ今度の敗をいふる年の
弊とて所産の一日も有らぬとをなるといふれば
こそ冷笑をうくるやまあ

エトロフ島畧圖

此圖ハ見達物語を以て入用なり
斗と昏一也



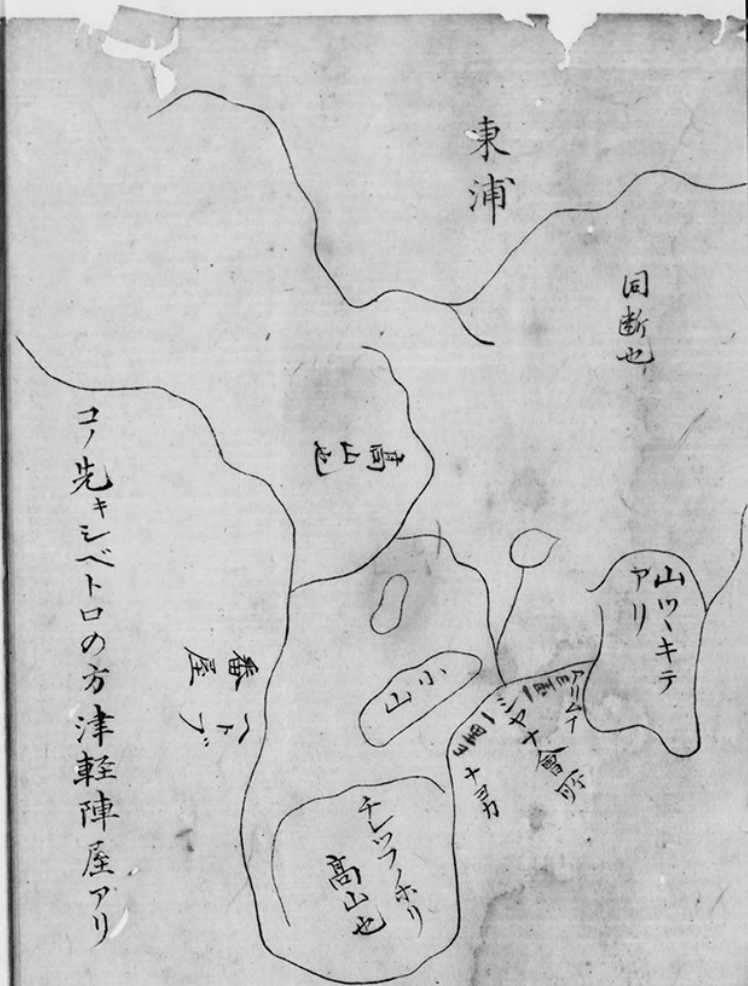
東浦



朱書



本^ト家勸書はシヤナ
 會^ニ元^ハ南^ニ船^ヲ家^ノ勸^ム
 シ^ト口^ハはウルヲ^ハ渡^ニは
 外界^ニシ^テハ津^ノ輕^ノ家^ノ
 勸^ムシ^テ口^ハとシ^テ口^ハ
 は^ニ方^ニと北^ノ向^ノの^ノ地
 火^ノ勸^ムを^ノ所^ニと^ノ建
 夏^ノの^ノ内^ノに^ノ信^ノ水^ノ海^ノと
 され^ニハ^ノ越^ノ年^ノの^ノ人^ノと^ノあ
 シヤナ^ノの^ノ本^ノは^ノ不^ノ成^ノり
 方^ニて^ノ空^ノ氣^ノを^ノ法^ノ一^ノを
 あ^ニあ^ニを^ノ改^ノ屋^ノは
 シヤナ^ノの^ノ本^ノは^ノ不^ノ成^ノり



コノ先^キニベトロの方津輕陣屋アリ

朱書

此冊墨附五十六葉自弘化丙午十月十四日
至同廿五日謄寫

廿五日夜燈下照原本
加朱點校訂畢

